

【研究ノート】

樺太アイヌのオйна
—B.ピウスツキと C.エッターによる英訳テキスト—

阪 口 諒

要 旨：本稿は英訳された樺太アイヌのオйна（神謡）を日本語訳し、註釈を加えたものである。こうした試みを行う理由としては、これまで知られている樺太アイヌの口承文芸が決して多いと言えず、オйнаとなるとその資料は非常に限られていることが挙げられる。本稿ではまず、訳註の前提としてオйнаに関する先行研究を振り返る。語りの形式や内容に関する記述が先行研究で一定しないが、それが地域差による可能性を指摘している。また、これまでに知られているオйнаなどのテキストを整理し、利用しやすいよう配慮した。そして、その上で英訳のみが公刊されているオйнаのテキスト 4 編の訳註を行った。アイヌ語の原文テキストは見つかっていないため、本来の語りを復元するのが困難なところも多いが、訳註に当たって類話の調査を可能な限り行い、詳細な註を付すことで、本来の語りに近づけられるよう努めた。

キーワード：樺太アイヌ、口承文芸、オйна、ピウスツキ、エッター

0. はじめに

樺太アイヌの物語は日本語で読めるものが大半だが、いまだに日本語に翻訳されていないものが存在する。本稿ではそうしたもののうち、今まで採録数が少ないオйна 4 編の日本語訳を行う。そのうち 3 編は、ブロニスワフ・ピウスツキが採録したもので、樺太東海岸のものと推測される¹。カール・エッター²採録のもう 1 編は、ジャンルは記録されていないもののヤイレスポが登場する点³からオйнаだと判断し、併せて訳注をおこなった。これまで公刊された樺太、特に東海岸のオйнаは非常に少ないため⁴、その資料を広く紹介するという点でも重要だと考える。以下では Pilsudski (1912a) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore* に言及する際、【研究資料】とする。

1. オйнаというジャンルに関して

【研究資料】に基づく、樺太アイヌの口承文芸（歌謡やなぞなぞを除く）はハウキ（英雄叙事詩）、オйна（神謡）、ウチャシコマ（伝説）、トウイタハ⁵（昔話）というジャンルに分けられる（Pilsudski 1912b もこの 4 つのジャンルからなる）。ハウキとオйнаは各行が 5 音節に揃えられる。ハウキは英雄の冒険と部族同士の戦いを語った物語であり、男性が語るものである。オйнаはその多くが半神半人の、超自然的な敵や野獣との抗争を語ったもので、リフレイン⁶をつけて謡われる。語り手は男性・女性の両方になる⁷。ウチャシコマは地方の村長と結びつけられることの多い口伝の歴史で、たいいてい高齢の男性が語り手となる。トウイタハはすべて夢に端を発するもので、ふつう婦人と子供が語るものである。

本稿で訳出するオйна 4 編のうち、3 編（①～③）はピウスツキによって採録・英訳されたものである。ピウスツキがこのジャンルをどのように認識していたのか知るために、少し長いが、ピウスツキによるオйнаの解説の全文を以下に引用する。

ojna すなわち「古代の（註—原文は ancient）」（ただし、jaj ojna は「一人語りする」）。北海道では、このジャンルは kamuj jukara すなわち「神謡」とも呼ばれる。これは、ふつう節をつけて歌われる伝説詩で、それぞれ独自のリフレインがついており、それは表題と一致することが多い。この中には、テーマがおとぎ話〈tuita〉と非常によく似ているものもある。だが、これらの物語詩の大きな部分を占めているのは、最初のアイヌ人である半神半人の、超自然的な敵や野獣との抗争を語ったものである。その中では、主人公はふつう、姉や兄と一緒に暮らしている。ただし彼らは主人公のような魔力は持っていない。これらの詩の中からは、人間と獣との関係について指し示すものを見てとることもできる。これは、アイヌ人が何故、自分たちが動物と血縁関係があると認めているかを、教えてくれるものである。この ojna は、ふつう座った姿勢で歌われる。そして歌い手には、記憶力の良さに加えて、音楽的才能と、耳に心地よい声の持ち主である男女になる（【研究資料】XVII；ピウスツキ 1983:110）

【研究資料】第 16 話（ウチャシコマ）にはヤイレスポが登場するが、その註には「ヤイレスポ Jajresupo は、文字通りには『自ら育った子供』であり、半神半人である伝説上の最初の人間の名前である。ヤイレスポは他の様々な伝説、例えばオйна Ojna と呼ばれるもので見ることができる」（【研究資料】154、拙訳）とある。知里（1953:193）には「ヤイレスポは西海岸の語で、そのもう一つ前の形は東海岸で云うヤイレスポである。ヤイ・レス・ポ『自分を・育てた・子』『ひとり育った子』、即ち『孤児』の義であるが一樺太では固有名詞化して人間の始祖—北海道のアイヌラックルに相当する—をそう呼んでいる。オйна（神謡は多くこの始祀を中心としてその事蹟を歌った物語である）」とある。知里（1953）には、火の神や山の神と思われるもの、ソリをひく犬が主人公となって自叙する物語もオйнаとして掲載されているが、そのいずれにもヤイレスポが登場するという点で共通する。ピウスツキも【研究資料】第 17 話の註で、ヤイレスポに関する話はすべて伝説歌謡（オйна）である（【研究資料】162）としている。

ただし、西海岸北部の物語を記録した Ohnuki-Tierney（1969）の Tale6、7 のようにヤイレス(一)ポが登場しないオйнаもある。また、知里真志保が NHK の依頼で 1951 年に採録したレコードにはリフレインも節もある東海岸の「トゥイタッ」が二つ収録されている（NHK Vinycord 1951）が、西海岸北部出身の話者 2 名はこれらの物語を聞いて、リフレインが付くものは全てオйнаだという証言をしている（萩中 1987:395）。この証言と先ほどのピウスツキや知里の指摘から、西海岸北部ではリフレイン・節のあるものは全てオйнаとして扱われるのに対し、東海岸ではヤイレスポが登場するものでなければオйнаとして扱われない可能性が指摘できる。つまり、東海岸ではリフレイン・節があってもヤイレスポが登場しないものはオйнаではなく、トゥイタハと扱われているということである。実際、以下で言及する Iso reske ojna や Pilsudski（1912b）中のオйнаのテキストは 1 編を除いてヤイレスポが登場している（その 1 編である「第 3 話 月の人」にはヤイレスポという名前は出てこないが、類話から主人公はヤイレスポである可能性がある）。

2. その他のピウスツキ採録のオйна

ピウスツキが採録したオйна 33 話（本稿で訳出する 3 話を含む）のタイトルは Pilsudski (1998b:261) に見ることができるが、大半のテキストの行方は現在まで知られていない。ピウスツキが採録したオйнаでアイヌ語原文・日本語訳が公開されているものとしては Isoreske ojna がある。これは 1903 年 5 月、トゥナイチ（富内）村出身のアイヌのクサイ⁸（30 歳）が口述したものをピウスツキが書き取ったものだという。ピウスツキによれば「アイヌたちはこの伝承を、熊を殺すときに執行される祭祀の説明として語ってくれた。その際、これはまた『サパネ オйна(sapane ojna)』、即ち、数ある伝承のうちで『最も重要な神謡』だとも告げられた」（ピウスツキ 2018:636）と記述している。このオйнаの概要（ドイツ語版からの翻訳）はすでに和田（編）（1999:41-42）に掲載されているが、Pilsudski (1998a:558-561) にはアイヌ語原文と英訳が、ピウスツキ（2018:628-636）にはアイヌ語原文と、そのロシア語訳の日本語訳が掲載されている。しかし、アイヌ語からの日本語訳はなされていない。

3. Pilsudski (1912b) Ainu Folk-Lore 収録のテキスト

今回翻訳するのは Pilsudski (1912b) に収録のオйнаである。Pilsudski (1912b) には 12 話の物語が掲載されているが、第 1～3 話はオйнаであり、第 4～6, 11 話はウチャシコマ、第 7～10 話はトゥイタハである。また、第 12 話はハウキであるという（Pilsudski 1912b:72）。このトゥイタハとハウキはピウスツキの他の著作で確認できないが、ウチャシコマ 4 話は【研究資料】に収録されているものと同じ話である（【研究資料】にのみアイヌ語テキストが掲載されている）。【研究資料】はすでに 1944 年に知里真志保によって日本語訳がなされ「樺太アイヌの説話」の中に見ることができる。さらに 1983～1992 年には北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会による全訳が藤村久和氏の詳細な注釈つきで『創造の世界』（小学館）で発表されているが、それらにも Pilsudski (1912b) のウチャシコマ 4 話に対応する物語が含まれている。参考に対応関係を以下の表にまとめておいた（表 1）。

表 1 : Ainu Folk-Lore に含まれるウチャシコマの他文献との対応

タイトル	【研究資料】	語り手（出身地）	「樺太アイヌの説話」	『創造の世界』
4. Origin of seal island ("robin island")	第 3 話	Sisratoka(Tarajka)	第 32 話	49 号
5. The sable-hunter	第 13 話	Pońćku(Aj)	第 9 話	74 号
6. Seal island	第 16 話	Numaru(Tunnaitchi)	第 16 話	47 号
11. Samayekuru and his sister	第 17 話	Ćibeka (Tunajći)	第 21 話	78, 80 号

※【研究資料】第 16, 17 話は 1943 年に和田文治郎氏によっても翻訳がなされ、第 16 話は「第 3 話 お祖父さんと孫」、第 17 話は「第 2 話 茶目な神様の失敗」として発表されており、和田（編）（1999）に再掲されている。

4. オйнаテキストの訳註

アイヌ語部分はカタカナにしたが、必要だと判断した場合には原表記を添えておいた。その際、イタリック体になっているものは翻訳でもイタリック体にした。原註は [1] のように表記し、訳註は後註にした。ピウスツキの英訳はアイヌ語のいわゆる一人称叙述⁹を

反映していると考えられる。なお、リフレインの存在には触れられていない。

4-1. Ainu Folk-Lore [1] 中のオйна

① フクロウ (THE OWL)

私はホロカルル Horokaruru [2] 村の大きな森に近いところで幸せに暮らしていたのだが、そのとき、ヤイレスポ Yairesupo [3] の妹はとても美しいと耳にした。そのため、私はヤイレスポの妹を自分の側におき、いつも家の戸口に近い位置で [4] 自分の膝元に座っているのを見たいと思って、ヤイレスポの家を訪ねて行って腰を下ろした。ヤイレスポは私に挨拶はしたが、決して話しかけようとはしなかった。(そこで)「あまり力の強いわけではありませんが、あなた様の妹を私の家で、我が膝元で見たいのです。そういうわけで、私はあなた様に会いに来たのです」と私は言った。しかし、ヤイレスポはこう答えた。「ああ、ろくでなしめ。お前はごわごわした羽の役に立たない鳥、小さなフクロウ男にすぎぬ。小さなフクロウよ、妹をお前と結婚させる気など毛頭ない」。そうした侮辱を聞いて、心の中に激しい怒りが巻き起こった。私は腹が立ったので出ていき、家の後ろに立っている大きな「イナウ inau」 [5] の上にとまった。そこに憤慨して座って、ヤイレスポの家に向かって甲高い声で大きく叫び始めた。高いところからの私の叫び声は(家の中の)女性の隅 [6] に落ちた。私は「イナウ inau」からヤイレスポたちに叫びを浴びせた。そのため、ヤイレスポの守護神(セレマキ *seremaki*) [7] は病気になり、ヤイレスポ自身、もう少しであの世 [8] を目にするとところだった。

二日の間、三日の間¹⁰、私は甲高い声で鳴いた。そして、ついにヤイレスポは言った。「小フクロウよ、これ以上怒らないでくれ！妹をあなたから控えることはもうありません。妹を連れて行って、見つめることを許します。その間に妹があなたの膝元に座るでしょう」。そうして、私は怒りを抑え、ヤイレスポの妹と結婚し、どこに行くのでも一緒に出掛けた。それゆえ私は人間(エンチウ *entsiu*)と同じ血を引いている。私は小さなフクロウ男に過ぎないが、人間と親戚になっている。

① 原註：

- [1] ここに紹介するアイヌ民話の標本は樺太のアイヌの間で採集したものである。第1～3話は伝説歌謡(オйна Oyna)、第4～6話は物語(ウチャシコマ Utšaškoma)、第7～10話は寓話(トゥイタ Tuita)、第12話は詩(ハウキ Hauki)である。
- [2] この地名はアイヌの民話にしばしば見られる¹¹。「後ろの海」を意味する。
- [3] 最初のアイヌで半神半人—樺太アイヌのすべての伝説におけるお約束の英雄である。
- [4] アイヌの住居内で女性が決まって座る位置である。
- [5] 部分的に切り取られ、垂れ下がった削りかけが付いた枝や棒のこと。これは神々への捧げ物と考えられている。
- [6] アイヌの住居の女性の隅は戸口に面して左手後方の隅であり、男性の隅は右手後方の隅である。
- [7] *ś, k*は口蓋化した *s, k*を表すのに使用している。
- [8] ポホナコタン Pohna kotan は死者の世界のことである。

②ラッコ (THE OTTER) ¹²

家で過ごしていたところ、海で溺れた男が死んだという知らせがきた。その知らせを聞くために戸口のところに行ったが、刀 [1] を忘れたので取りに戻って、再び戸口のところに行った。しかし、今度は鞆を忘れていたので、もう一度戻った。それから柄を忘れてしまったので、また取りに戻った。(さらに) 刀掛け帯を忘れており、4 回戻る羽目になった。そうしてやっと庭に出た。(しかし) 使者はもういなかった。使者を追って私は森に入ってしまった。川が曲がっているところで、私は川の中を歩いて渡った。私は川岸を歩き、川が曲がっているところでは反対の岸へと渡りながら進んだ。「ムケ タンタイセ、ムケ チャハチェ チャハチェ ¹³」[2]。悪魔の鳥が木の上に座っているのが見えた。その鳥はひどく怒っていた。「カニチン、カニチン、カニチン、おおい、小さなラッコ ¹⁴ よ、カニチン、カニチン！俺はヤイレスポ ¹⁵ の魂を奪いたい—カニチン、カニチン！—でも俺にはできない」とその鳥は言った。私はそれが気に入らないので立ち去った。「ムケ タンタイセ、ムケ チャハチェ チャハチェ」。川に沿って歩いているうち、川が二手に分かれているところに来た。二つの河床の間には、枝が東に伸びる巨大なカエデの木があった。そのカエデの枝の間に悪霊が家を作っており、その家には大きな入れ物（箱）があった。私は祈りをささげて洪水を起こした。(すると) カエデの木は根こそぎ倒れ、悪霊は水に流された。私はその入れ物（箱）を拾って、ヤイレスポの家に持っていき手渡した。ヤイレスポは私に感謝し、「イナウ」をくれたので私は新しい存在（カムイ *kamui*）となった。私は幸せに暮し、今はヤイレスポの守護神となっている。

②原註：

- [1] 溺死した男の知らせが村に伝えられたとき、使者と知らせを聞く人は、古い日本の刀を帯びている。
- [2] ラッコのゆっくりとした動きを表現する音。

②類話・コメント

物語の冒頭は物忘れがひどい様子を語っているように思われるが、ラッコにはそうしたイメージがあるのかもしれない。物忘れと言えばカワウソのイメージとして有名であるが、この物語の叙述者は *sea-otter* と呼びかけられているのでラッコと思われる。樺太ではラッコにこうしたイメージが付されているのだろうか。なお、北海道ではカワウソが、太刀を持ちながらも、そのことを忘れて神々に助けを求めるという話がいくつか記録されている（久保寺 1977:155-157 など）。知里(編訳) (1981:281) も「アイヌではカワウソは恐しく忘れっぽいものとされている。だから昔の男たちは、その肉を食うときは、わざわざ山姿をして（鉢巻をして、山刀をさし、荷縄を背負い、槍を傍へ引きつけて）食べた。さもないと、かならず何か忘れものをして、大事の際にまごつくものだったという。日常生活においても、よく物忘れする者を『あいつはカワウソだよ』と言い、また要領を得ない伝言や復命を『カワウソの走り使い』などと言う」と述べている。このオイナではラッコが主人公となっているものの、やはりヤイレスポが登場している。

③月の人 (THE MAN IN THE MOON)

私は姉¹⁶に育てられていた。毎日姉は水汲みに行った。姉は桶やひしゃくをたたいた¹⁷。ある時、姉の帰りを待っていたが、姉は戻ってこなかった。姉の帰りを三晩待ったが、姉は帰って来なかったので、心配になった。私は火の媼神に「イナウ」を捧げ、姉について尋ねたが返事はなかった。それから腹が立って、家の神（チセアタンバカムイ *tziše atamba kamui*¹⁸）に「イナウ inau」を作って尋ねたが、答えはなかった。そこで私は激怒して川辺に出ていき、川の神に尋ねたが、何の知らせも得られなかった。私は森にも行って「イナウ inau」を作り、エゾマツの媼神（*Picea*）¹⁹に尋ねたが、媼神は（姉の行方を）知らなかった。私はトドマツ（*Abies Veitchi*）²⁰に尋ねたが、無駄だった。私はすっかり怒って、そこから立ち去って、柳の低木の茂みの媼神²¹のところへ行って、尋ねた。（すると）媼神は答えて「私は柳の低木の茂みですが、おしゃべりなので、教えてあげましょう。あなたの姉は月に昇って行って、月の人と結婚したんです」と言った。

私は非常に怒って、邪悪な歩みとともに家に戻って行った。家に着くやいなや、私は黒い羽の矢と白い羽の矢を持って出ていった。最初に黒い羽の矢、次に白い羽のついた矢を飛ばして、両手で矢の端をつかんで、雲の間を抜けて空へ飛びあがった。すると、姉が現れた。家から出てきて笑っていた。姉は眉の端が垂れ下がっていた（にっこりと笑っていた）。姉は小さな女の子の手を引いていたが、そのような女の子は見たことがなかった。その女の子の顔は光り輝いており、その光はあらゆる面で広がり、私の頭を打った。美しい目で私は見つめられた。（すると）私の悪い気持ちはすべて消えてなくなった。姉は「弟よ、どうして怒っているの？ 月の人のおかげで、この美しい少女と結婚できるのが分からないの？」と言った。

その時から、私は気分が晴れ晴れとして、怒りはなくなっていた。私は家に入ると、神なる兄が鉄製²²の腰掛けに座っていて、私に優しく笑いかけていた。（そこで）私は満足して腰を下ろした。私はこれまでそのような男を見たことはなかった。家の神への「イナウ inau」が置かれている隅の近くには、屋根にまで届く宝箱 [1] があった。女性の座にも同じ様に梁に届くほどの宝箱があった。そして真ん中の鉄製の腰掛けの上に、神なる兄が座っており、私を見ていた。神なる兄は前に私を見たことがあるかのように、私を優しく見つめた。

それから家の女主人²³が私に食事を出してくれた。そして主人（神なる兄）は「私は神である。私はそなたの姉がほしいと思っていた。それゆえ、桶とひしゃくを扱っていたそなたの姉を私の家に連れてきたのだ。ここで、私たちは結婚し、非常に幸せに暮らしている。さあ、みすばらしい娘ではあるが、娘を連れて行って、結婚しなさい。少なくとも水汲みには困らないだろう」と言った。

その時以来、私は月の人と親戚関係になった。神なる兄は姉と結婚し、男の子と女の子の二人の子供が生まれた。私たちは長者となったが、子供もなく、年を取った²⁴。（そのうち）姉は授かった子供を育て上げて年老いた、ということ、私たちは鳥から耳にした。

③原註：

[1] この場所に通常設置されている箱の中に、アイヌは宝—刀、矢、弓、矢筒—をしまっている。かつてはこの場所の高さから、家の主人の豊かさが分かった。

③類話・コメント

本話がオйнаであるとすれば登場する姉弟はヤイレスポとその姉かと思われる。物語①②でも主人公はフクロウ、カワウソとなっているが、やはりヤイレスポが登場している。知里（1953:214-215）「神謡『月中の人』」²⁵では、「月中の人のことを樺太では『チュフ・アイヌ』（Chux-aynu [月・人]）と云っているが、その由来について、樺太でも類話が神謡として伝えられている。次に掲げるのは畏友和田文治郎博士の採集にかゝるヤイレスポ自叙の神謡（昭 19. 12. 20 富浜、木村チカマハ述）である」として、ものぐさなヤイレスポの妹が月にとらわれてしまったという神謡が紹介されているが、本話とはかなり違う展開のものである。名取（1943:12）には「水汲みに出た女が手桶を提げて『お月様はよいなあ。あんなに何もしないで静かにして居られる。妾は水汲みしたり、働かねばならない。』と羨しがったので、女の後ろについてみた犬と一緒に、お月様の中へ這入ってしまったと云はれ、今でもその手桶を提げた女と、犬が、お月様の中に見えるのだと云ひ伝えられてゐる（新間アイヌ、森誠藏氏²⁶談）」とある。また『アイヌ語ロシア語辞典』にも *cuh-aynu* のことが掲載されており、「Chup, — ájnu. (名) 月面に輝く天体の神の姿（手や足が見える）」〔ドブロトゥヴォールスキー2017:75[Dobrotvorskij 1875:428]〕とある。ただ、序章の第2節には「さらに月の神の顔も晴れた夜に月の表面上に見ることができる」〔ドブロトゥヴォールスキー1996:87[Dobrotvorskij 1875:40]〕とあり、手や足ではなく顔が見えることになっている。

4-2. カール・エッター採録ヤイレスポ²⁷の物語

Etter（1949:139）にはオйнаとは記載されていないものの、ヤイレスポが登場する物語が掲載されている。以下のタイトルは筆者が仮につけたものである。

④ヤイレスポと病気の神（仮）

樺太では、私は樺太アイヌの間で、あらゆる病気の原因になっているらしい病気の神のことを聞いた。この樺太の伝承にはこうある。ある日、ヤイレスポ（Yaeresubo）という名のアイヌが海岸に散歩に行った。海辺に小さな小屋を見つけ、そこに近づいた。誰かがそこに住んでいるのだろうかと思った。ヤイレスポが小屋に近づくと、二人の神が小屋の中で話すのが聞こえた。二人の神のうち一人は、「俺は病気の神だが、人間を殺すことが大好きなんだ。実際に多くの人間を殺してきた」と言った。

もう一人の神は自分が食物の神であると言った。二人の神が話しているとき、ヤイレスポは自分の名前が聞こえた。病気の神の犠牲者の名簿の中に自分の名前があるのを恐れた。このことでヤイレスポは怒り、小屋とともに二人の神を海に投げ入れた。

食物の神は煙となって逃げ出したが、病気の神は驚いてどうして良いかわからない様子だった。食物の神は天に上り、雲の上で休息するために止まった。そして、病気の神に向かってこう叫んだ。「あなたは巫力が強いことを誇っていたのに、ヤイレスポに見つけられ、自分の小屋から逃げられなかった」。

この物語の語り手は、ヤイレスポが食物の神を見たことのある唯一の人だと言った。この伝承は、食物の神が病気の神よりも力が強いことを示しており、アイヌは、善の力が悪の力よりも強いという信念を持っていることを示すもう一つの例となっている。

注釈

- ¹ ビウスツキ (2000) によれば、ピウスツキは西海岸の真岡にも行っているが、物語の採録はうまくいかなかったようである。
- ² Etter (1949) によれば、戦前、北海道帝国大学の講師 (神学だろうか) を務め、1931～1932 年にかけて北海道、千島、樺太を回り 200 以上のアイヌの伝承を採録したという。イギリス人研究者のマンローや宣教師バチェラー、金田一京助などとも交流があり、様々な助言を受けたようである。エッターの遺稿はスミソニアン博物館の国立人類学アーカイヴズに収められている。
- ³ ヤイレスポ (地域によってヤイレズなどとも言う) は樺太アイヌの伝承に登場する半神半人の文化英雄であるが、オイナにはヤイレスポが重要人物として登場することがほとんどである。ただし【研究資料】第 16 話のようにオイナでなくても登場することがあるので十分条件ではない。なお、更科 (1981:235-236) にはヤイレズが登場する北海道北部宗谷の物語が収録されている。
- ⁴ 知里 (1953) に東海岸のものが 5 話掲載されている。東海岸各地でアイヌ語資料を採録した金田一京助はオイナを 1 つも採録していないようである。というのも、金田一 (1993[1943]:333) には「この説話 (註=【研究資料】第 1 話) は昔語とはいふものの、やはり寔 (註—まこと) にはオイナであるらしく、ちゃんと韻文になっている。但し同博士 (註—ピウスツキのこと) は散文の様に書き流してしまって居られる。素朴ではあるが、これまで、樺太アイヌのオイナの標本は、外には全く採録されてないので、貴重な資料である」と述べているからである。なお、これに対して知里 (1973[1944]:265) は「人文神たるオイナの主人公はヤイレスポと称せられ、ウチャシコマ (昔話) の主人公たるルルパの首領とは区別される。本篇はルルパの少年に関する物語であるから、明かにウチャシコマの方だと、これは白浜のアイヌの老翁の意見をそのまゝ記して、私もそれに賛成しておく」と述べて【研究資料】第 1 話をウチャシコマであるとしている。
- ⁵ ビウスツキはトゥイタ *tuita* としているが、混乱を防ぐため、ジャンル名はトゥイタハとする。トゥイタハに関しては丹菊 (2001、2002) が詳しい分析を行っている。
- ⁶ オイナのリフレインは *saakehe* や *motoho* と呼ばれる (村崎 1989:6)。また、萩中 (1987:395) には西海岸北部出身の話者 2 名の言葉として *hosipika* が紹介されている。
- ⁷ Ohnuki-Tierney (1969:3) にあるように、女性は男性のように節をつけて語ってはいけないという証言もある。それに対し、村崎 (1989:6) には、オイナは女性が語るものだとして記されている。
- ⁸ 金田一 (1993[1913]:9) には「今此処に訳出した一篇は、明治四十年の夏樺太の東海岸トンナイチャ (今の富内村) のアイヌ東内忠蔵 (アイヌ名ラマンテ、一名クサエ、今は故人となる) の伝承を筆録したものに係るハウキである」とあり、クサエという名前がラマンテ (東内忠蔵) の別名として見える。ラマンテ (*Ramante*) は【研究資料】第 11 話 (1903 年の採録当時 36 歳) をはじめとした民話をピウスツキに語っている。このオイナもラマンテが語ったものかもしれないが、年齢は合わない。どちらも 1903 年 5 月に採録されたものだという。
- ⁹ 物語は特定の登場人物の視点から語られる。樺太のオイナを含めた神謡の叙述者の人称に関しては中川 (2011) で詳しく論じられている。
- ¹⁰ 「2 つの～3 つの～」という表現はアイヌ語の常套句で「たくさんの～」を表す。ここでは長い間鳴いたことを示す。
- ¹¹ 第 2 章で言及した *Iso reske ojna* にホロカルルケシが出てくるのみで、類例があるかは不明である。
- ¹² 物語の途中で *sea-otter* 「ラッコ」と呼びかけられているので、ラッコとしておいたが、*Otter* のみではラッコなのかカワウソなのか判断できない。
- ¹³ 金田一 (1913[1993:22]) に「アンコン、ニマム／チャツチェ、フミ／コサシナタラ (我が乗る舟の／駛る音／さらさらと鳴り出づ。)」とあり、註には「*charase*(馳す)*humi*(音)」とある。【研究資料】に「*Neja ájnu túxse manújke, úmun éis síke káta múke éarašeté širóšma manu.* (その男は(舟の中へ)跳び込んで、艫の舟板の上をころころと転がって倒れた)」(100 ; 訳は知里(1973[1944]:330)を参考にした)とあり、*múke* には「*with hands stretched forwards* ; the root is *mu*, 'to creep, to climb' (手を前の方に伸ばす。語源は *mu* 「はう、のぼる」)」と註がつけられている。
- ¹⁴ ここでは *sea-otter* 「ラッコ」と呼びかけられている。
- ¹⁵ 英語訳では *Self-brought-up-Man* となっているが、第 1 話フクロウ で *Self-brought-up-Man* (*Yairesupo*) という記述があるので、ここでもヤイレスポとしておいた。
- ¹⁶ 英訳で *My elder sister* となっているが、知里 (1953:214-215) の「神謡『月中の人』」は、ものぐさ

なヤイレスポの妹が月にとらわれてしまったというものである。

- ¹⁷ この物語では姉が月に行くことになった経緯が詳細に語られていないが、知里（1973:248-249）などの類話を見る限り「桶はいいなあ、水を汲まなくて」と言って桶を叩いた罰として月へ召されたと考えるのが自然だと思われる。しかし、話の後半では、月の人が姉と結婚したくて月につれて行ったのだと明かされている。娘が月にのぼるという伝承はシベリアに多く見られる。荻原（1995:115-116, 260-263）にはユカギールとエヴェンの類話が紹介されている。
- ¹⁸ 英訳は the god of the house. この神は he, him と表現されていることから男神のようだが、類例が見つからず、具体的にどのような存在なのかは不明である。
- ¹⁹ *Picea* はトウヒ属であるが、ここではその仲間のエゾマツ（*Picea jezoensis*）と推定した。
- ²⁰ *Abies Veitchii* はシラビソ（白檜曽）であるが、シラビソは北海道・千島・樺太には分布しない。そのためここでは、北海道・千島列島・樺太に分布する近縁のトドマツを訳として採用した。なお、トドマツの学名は *Abies sachalinensis* である。
- ²¹ 英訳は Willow-Bush. 知里（1953:214-215）では、おしゃべりな山の萩が、ヤイレスポの妹が月に連れていかれたと教える。ここでも山の萩のことを言っているのかもしれない。
- ²² 英語では「鉄製の」となっているが、ここはアイヌ語の *kane*(~i)「金の」で立派な腰掛けのことを言っている可能性がある。*kane* に関しては【研究資料】29 頁にも言及があり、伝説や昔話では木や家が *kane* と形容されることがあるが、アイヌが木や家が鉄であるということや、そうしたものが強度や硬度といった鉄の性質を持っていると言いたかったからではなく、最大の賞賛を表しているのだと思う、とある。
- ²³ 叙述者の姉ではなく、月の人の妻で、美しい少女の娘の母であろうか。
- ²⁴ この物語はハッピーエンドのようにも見えるが、子どもができないという点で特異である。
- ²⁵ 知里（1973:250）に再録されている。
- ²⁶ 知里（1973a:320; 1973c:586）によれば、森誠蔵（モヤンケ）氏はタライカ生まれで 1942 年当時は新聞に住んでいたという。
- ²⁷ 原文のつづりは *Yaeresubo* だが、カタカナ表記ではヤイレスポとした。

謝辞

英語からの翻訳に際しては藤田護氏に助言を頂いた。この場を借りてお礼申し上げる。翻訳に誤りがあれば、すべて筆者の責任である。さらに、貴重なコメントをしてくださった匿名の査読者 2 名の方にも深く感謝申し上げたい。

参考文献

- Dobrotvorskiĭ, M. M. (Добро́творский, М. М.)
 1875 *Ainsko-Russkij Slovar'*. Kazan (Аинско-Русский Словарь. Казань) .
 Etter, Carl
 1949 *Ainu folklore : traditions and culture of the vanishing aborigines of Japan*. Wilcox & Follett, Chicago.
 Ohnuki-Tierney, Emiko
 1969 *Sakhalin Ainu Folklore*. American Anthropological Association, Washington, D.C.
 Pilsudski, Bronislaw
 1912a *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*. Cracow.
 1912b *Ainu folk-lore. The Journal of American Folklore* 25(95):72-86.
 1998a *The Collected Works of Bronislaw Pilsudski Vol.1: The aborigines of Sakhalin* /ed. by Alfred F. Majewicz, Mouton de Gruyter, Berlin; New York.
 1998b *The Collected Works of Bronislaw Pilsudski Vol.3: Ainu Language and Folklore Materials 2* /ed. by Alfred F. Majewicz, Mouton de Gruyter, Berlin; New York.
- 荻原眞子
 1995『東北アジアの神話・伝説』東方書店、東京。
- 金田一京助
 1993[1914]「北蝦夷古謡遺篇」金田一京助全集編集委員会編『金田一京助全集 第9巻 アイヌ文学

- Ⅲ』三省堂、7-134.
- 1993[1943]「アイヌの神典—アイヌラックルの伝説—」金田一京助全集編集委員会編『金田一京助全集 第11巻 アイヌ文学V』三省堂、東京、284-411.
- 久保寺逸彦（編訳）
- 1977『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店、東京.
- 更科源蔵
- 1981『アイヌ民話集 更科源蔵アイヌ関係著作集Ⅱ』みやま書房、札幌.
- 丹菊逸治
- 2001「サハリンアイヌ散文説話の一ジャンル tuytah について—「挿入歌」からみた文字資料—」村崎恭子(編)『少数民族言語資料の記録と保存—樺太アイヌ語とニヴフ語—』(ELPR A2-009). 大阪学院大学情報学部、吹田、69-90.
- 2002「サハリンアイヌの散文説話 tuytah について」『口承文芸研究』25:37-48.
- 知里真志保
- 1953「樺太アイヌの神謡」『北方文化研究報告』8:185-240.
- 1973[1944]「樺太アイヌの説話（一）」『知里真志保著作集』1、平凡社、東京、251-372.
- 知里真志保（編訳）
- 1981『アイヌ民譚集』岩波書店、東京.
- ドブロトゥヴォールスキー, M. M.
- 1996 寺田吉孝（訳）「M. M. ドブロトゥヴォールスキーのアイヌ語・ロシア語辞典(3)」『北海学園大学学園論集』86・87:79-91.
- 2017 寺田吉孝・安田節彦（訳）「M. M. ドブロトゥヴォールスキーのアイヌ語・ロシア語辞典(22)」『北海学園大学学園論集』173・174: 47-121.
- ピウスツキ, ブロニスワフ
- 1983 中川裕（訳）「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料・序文」『創造の世界』46:101-119.
- 2000 萩原真子（訳）「B. ピウスツキのサハリン紀行」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6:219-240.
- 2018 井上絃一（訳）「樺太アイヌの熊祭りにて」井上絃一編『ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌—二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイルタ』東北大学東北アジア研究センター、仙台、483-646.
- 1983-92 北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会（訳）「B・ピウスツキ／樺太アイヌの言語と民話についての研究資料<1〜30>」『創造の世界』46-84.
- 中川裕
- 2011「アイヌの神謡における叙述者の人称」『北方言語研究』1:139-156.
- 名取武光
- 1943「月と若水」『北の會報』1(1):12-13.
- 萩中美枝
- 1987「アイヌの口承文芸オイナ」『国立民族学博物館研究報告』別冊 5:389-403.
- 村崎恭子
- 1989『樺太アイヌ語口承資料 1』昭和 63 年度科学研究費補助金研究成果報告書、札幌.
- 和田完（編）
- 1999『サハリン・アイヌの熊祭—ピウスツキの論文を中心に』第一書房、東京.
- NHK Vinycord
- 1951「樺太アイヌ昔話 トウイタツ」（国立国会図書館歴史的音源で視聴、レコード番号:VC-26）.

（さかぐち・りょう／千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程）